

宮城学院女子大学

Partir

[パルティール]

VOL. 15

2013.3

あなたのこれからに贈りたい
Live Letter from MG



01 誌上ゼミ

「ヨーロッパ」を多様に読み解く

05 学問へのいざない

「アウトドア環境教育」を学ぶ

「外国語習得の術」を学ぶ

07 特集

未来への一歩を応援します

就職サポート最前線

09 ACTION

街に元気な想いを届けたい。

11 My way MG way

卒業生の仕事場訪問

13 サークル紹介

14 CAMPUS NEWS

15 学長エッセイ

「Partir (パルティール)」はフランス語で「出発する」
新しい時代に飛び立とうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

「ヨーロッパ」を多様に読み解く

〜 私たちが魅せられる国・人・文化とは？

研究と実習を通じて様々な価値観を発見する

ヨーロッパに思いを馳せながら
バラエティ豊かなテーマで論じ合う

今林 私たちの「国際文化演習Ⅱ」は、ヨーロッパに関心を持つ学生が集まるゼミです。本来、私の専門は政治学ですが、みなさんはその枠にとどまらず、一人一人が興味を持ったテーマについて研究しています。

毎回、各自が調べた内容をレジュメにまとめて報告し、疑問や問題点などをみんなまでディスカッションしています。来年に迫った卒業論文の作成に向けてテーマを絞り込み、

自分なりの切り口で論理的にまとめられるよう、日々頑張っています。

さて、清野さんは「脱クルマ社会」をキーワードに、ヨーロッパ各国の取り組みを調べていますが、進捗はいかがでしょう。

清野 はい。私は人口二人当たりの自転車保有率が世界1位のオランダに着目しました。実は日本も自転車保有率が高いのですが、使用率となると1割にとどまり、対してオランダは3割。なぜここまで利用が進んでいるのか、オランダの自転車政策に焦点をあてて要因を探ってみました。



各自が研究成果を発表し、それぞれの目線で議論することでより視野が広がります。

国際文化学科
今林 直樹
教授

「国際文化演習Ⅱ」の皆さん
清野葉月さん、大森絵美香さん、
和田咲希子さん、齋めぐみさん、
ほか5名のみなさん





今林直樹教授

主な要因として4つ挙げられます。平坦な地形と降水量が少ない自然条件、国民が子ども時代に受ける自転車教育、電車への自転車持ち込みなど、公共交通機関の積極的取り組み。そして自転車利用者に課せられる高い税金です。自転車＝低コストという認識が定着しているようです。

大森 自転車利用者に課せられる税金はどの程度高いのでしょうか。

清野 今後、より詳しい資料を集め、具体的な数値を出して報告したいと思います。
今林 コスト面で実際に比較できれば、より

説得力がありますよね。資料探しも卒論作成の大切なプロセスなので、ぜひ頑張ってください。

自転車「政策」を論じるなら、まず国の環境政策という点から見る。次に地方公共団体がどのように運営しているか。そして教育制度はどうか。そうした



清野葉月さん



大森絵美香さん

視点も盛り込み、総合的に研究を進めていければ面白いと思います。

一つのテーマを深く掘り下げ ヨーロッパを起点に世界を見る

今林 大森さんは、ドイツ文学における「メルヘン」という領域に興味を持ち、研究を始めましたね。

大森 メルヘンは童話や民話、おとぎ話などと訳され、ほとんどが空想的な物語です。まず私は、そもそもメルヘンとは何かについて調べました。

メルヘンとは集団記憶であり、夢であり、神話的。主人公はいい人であり、ハッピーエンドで終わる。そこには飢饉などで苦しむ昔の民衆の願いが込められているそうです。また、文学的装飾が少なく、「いつ・どこで・だれが」を特定しないため、時代を超えて誰もが共感できると考えられます。

今林 そうした特徴は、グリムの時代に確

立していたのでしょうか。グリム童話は当初、ハッピーエンドではありませんでしたね。

大森 口承文芸だったメルヘンは、グリム兄弟によって一つの文学形式になりました。

確かに、グリム兄弟は結末を書き換えています。メルヘンの特徴が当時の人々に認識されていたかどうかは不明です。今後はグリム童話などもとよりあげながら、その中でヒントを見つけられればと思います。

今林 メルヘンの成立、これは文学の歴史の中で問われるテーマだと思います。ドイツを軸にして他のヨーロッパ諸国の文学にも視野を広げて研究に励んでください。



**個々の研究成果をベースに
今後の方向性やテーマを見つけ出す**

和田 私は「シテイズンシップ」について研究中です。日本では市民権、つまり市民という地位にもとづいた権利を指すことが多いようですが、他にも「国籍」などさまざまな意味を持っています。

ヨーロッパにおけるシテイズンシップというと、まず挙げられるのが移民の問題です。ヨーロッパ諸国ではヨーロッパ系だけでなく、アジアやアフリカなど非ヨーロッパ系移民も非常に多く、定住化する傾向があります。そうした人々のために、フランスでは非正規滞在者の正規化、オランダでは5年以上滞在する外国人に地方参政権を認める、といったさまざまな政策が実施されていることがわかりました。

今林 ヨーロッパ統合が進む中での移民との共生。この問題は各国の移民政策を知



和田咲希子さん



齋めぐみさん

ることが重要です。もう少し焦点を絞った方が、論じやすいかも知れません。

和田 はい、今後はEUの枠組みに絞り、「欧州市民権」をテーマに研究を続けていきたいと思っています。

今林 期待しています。では最後に齋さん

はいかがでしょう。

齋 私はフランス人女性の出産、特に産後のケアを調べてみました。

フランス人女性の出産平均年齢は日本とほぼ同じ29・7歳。決して若くはありませんが、出生率は日本の1・4に対してフランスは2・0と明らかに違います。フランスでは、医師から産後リハビリの積極的指導がなされ、その費用はほぼ社会保険が負担するそうです。この産後ケアが第二子を生みやすいポデイコンデイションを整え、出生率の差となっているのではないかと思います。

以前フランスの事実婚を調べた時同様、今回の調査でもフランス人女性は「女性であること」の意識がとても高く、そしてとても自由だと実感させられました。

今林 その国ごとに背景があり、文化の違いは日常のさまざまな場面で形となって表れるものです。これまでの調査をベース



に、今後の研究の方向性は決まりそうですか。

齋はい。やはりフランスの生活文化に密着した研究が興味深いので、次回は「家族手帳」という制度を取り上げていきたいと思えます。

海外実習で異文化を体感・交流 自分自身が成長する力に

小林 齋さんの「家族手帳」のように、研究テーマによっては日本で思うような資料が見つからない場合があります。そんな時は、海外実習で交流した現地の方々には協力をお願いする方法をおすすめします。

昨年度はフランス・ノルマンディー地方で、今年度はオーストリアおよびドイツで実習が行われました。ゼミ生の中には実習に参加してそれぞれ現地での生活を体験した学生もいます。大学のキャンパスでは実感できない人々の暮らしぶりや生活習慣を含め、さまざまなことを学んで



優しく見守ってくれた
フランスのホストファミリー



海外実習では、海外で友人が
できる機会もあります
(写真提供 齋めぐみさん)

きたことと思えます。そんなかけがえのない経験を、ぜひ研究に役立ててください。

齋私はフランスの家庭でホームステイをしたので、そのホストファミリーや友人にアプローチし、現地の声を活かしながら調査を進めたいと思います。

小林 ヨーロッパには、みなさんが心を動かされるテーマがあふれており、他のメンバーも「ゴシック建築」、「マリー・アントワネット

ト」、シャガールが描いた「ユダヤ人の文化」など、非常に興味深い研究を行なっています。この場で成果を発表し、意見を交換することで、お互いにより刺激になつてい

るのではないのでしょうか。

みなさんはぜひ今後、より広い視野でヨーロッパ、ひいては世界を展望できるように、実り豊かな研究活動を進めていただきたいと思えます。





「アウトドア環境教育」を学ぶ

発達臨床学科 西浦和樹教授

「生きる力」を育むヒントは スウェーデン発の教育活動に

私は教育心理学を専門にしており、「環境」や「健康」、「創造性」などをテーマにさまざまな研究活動を行なっています。中でも近年最も関心を寄せているのが、幼児から小学校低学年までの子どもを対象とした「アウトドア環境教育」。教室で教わる従来のインドア型授業ではなく、森林、公園などの野外に学習フィールドを広げ、経験を通して子どもたちのさまざまな能力を引き出すために開発された教育活動です。

昨年度、私はその先進国である北欧・スウェーデンへ1年間滞在し、この領域を専門に活躍される王立大学のシェバンスキー先生のもとで、アウトドア環境教育の実践活動や指導者育成プログラムなどを体験する貴重な機会を得ました。

教室から解放された子どもたちは、動植物に触れながら生き活きと活動していきます。そして、みんなで拾った木の枝を並べ長さを考えたり、切り株を観察して円の概念を学んだり、数学や理科の感覚を自然に身に付けていくのです。こうした経験や知識は、やがて問題解決力や協調性、健やかさといった「生きる力」へ発展していくと考えられており、そこへ導く教育者のスキルも非常に重要視されています。

自然の中で学ぶ大切さを 保育者を指すみなさんに

スウェーデン中の保育者は、先生が所長を務める研究センターで指導を受け、日常の授業にアウトドア活動をバランス良く取り入れているそうです。同センターには、ヨーロッパやアジア各国の教育関係者も多く在籍し、野外の教育活動に対する世界的な関心の高まりを感じました。



自然に触れることで心理的ストレスが軽減することは既に実証されています。今後、私は一年間の経験と収集した資料を元に研究を進展させ、教育心理学の視点を加えた形でこの教育活動を多くの方に紹介していきたいと考えています。

保育者を目指す学生のみならず、ぜひ私の追体験をしていただきたく、スウェーデンへの研修旅行も企画しました。「生きる力」を育むヒントを探しながら、美しい自然の中でスキルと感性を磨き、将来に役立てて欲しいと思います。

Profile

京都府出身。広島大学教育学研究科において博士(心理学)を取得。被災直後から、心のケアのための災害臨床プログラムの提供を積極的に行うなど心の復興支援に取り組む。詳細は、震災復興 心理・教育臨床センター(<http://ejcenter.wordpress.com/>)を参照

私のおすすめ本

選択の科学 (音楽之友社)

シーナ・アイエンガー著／櫻井祐子訳

人はどのように物事を選択しているか、徹底的かつ科学的に分析した本です。今や産業界の常識となった「ジャムの法則」をはじめ、ビジネスや実生活をイメージしながら身近な問題として考えられる調査結果が豊富に紹介されています。



これが学びのツボ!

学問は日々進歩するもの。「ここが大切」と言われるものもすぐに古くなってしまいます。常にアンテナを張って新しいものを求め、自分の中に取り入れること。それが「創造性」を高めるポイントです。



「外国語習得の術」を学ぶ

一般教育科 木村春美准教授

**言語習得の仕組みを理解し
単なる「知識」を使える「スキル」に**

今年度より一般教養科目の英語を担当しています。出身は真珠の産地として知られる三重県で、前任の愛知県大学へは片道2時間以上かけて通勤していました。徒歩通勤の仙台的暮らしはとても快適な上、皆さんの人柄も温かく、すっかり気に入っています。

私の専門は「第二言語習得」という研究分野で、人が母語の次に言語を身に付ける過程を科学的に説明する学問です。私たち日本人の場合、日本語は自然と話せるようになるのに、中学・高校で6年間も学ぶ英語の習得は難しいですよ。それはなぜか、という問いがこの学問の基本的なテーマになっています。

日本人のほとんどが「英語の知識はあるけれど、スキルになっていない」のが現実。

車の運転に例えれば、動かし方は知っているけれど運転できないペーパードライバーと同じですね。まず、知っていることを使うこと、これが何より大切です。実は私自身が研究者になる前、実際に使うことで英語の楽しさを知りました。学生の皆さんには、そんな経験と研究分野の理論を踏まえながら、楽しく実践的な学習機会を提供できればと考えています。

**自分の興味に結びつけ
実際に使って何度も繰り返し返す**

「知っていることを使う」ために、授業は運用の練習が中心です。例えば、音楽や読書、思い出深い旅の話などをテーマにペアワークで行うプレゼンテーション。自分と仲間の好きなことに結びつけると、モチベーションを高めながら取り組めますよね。次に大切なのは「繰り返し」こと。ペアになる相手を次々と変えていきながら

自分の足りない部分を少しずつ補い修正しつつ身に付けていきましょう。

「文法ができないから英語ができない」と考える人が多いようですが、初めは単語を組み合わせただけの会話からスタート。そう考えると少し楽になりますよね。受験勉強から抜け出せず、気持ちでブロックしてしまうのは、とても勿体ないことです。

さあ、今まで蓄積した知識をどんどん使いましょう。「脱・英語のペーパースピーカー（注）」を目指し皆さんのお役に立てるよう、今後も頑張りたいと思います。

注 岐阜大学のレッド・パーカー先生の造語です。



Profile

三重県出身。子育て一段落で学問に復帰。テンブル大学大学院博士課程修了。専門は英語教育・第二言語習得。教育学博士。宮城の美しい森を歩き、自然の中に身を置いて写真を撮る。

○信条 “Tomorrow is another day.” (風と共に去りぬより)

私のおすすめ本

外国語学習に成功する人、しない人 (岩波科学ライブラリー)

—第二言語習得論への招待—

効果的な外国語学習法はどのようなものか、この分野の最新理論に基づいて解説しています。日本人が外国語に苦手意識を持つ理由や、外国語習得のコツなどもわかりやすく紹介しているので、学生さんだけでなく幅広い方におすすめの一冊です。



これが学びのツボ!

「知っている」と「使える」は大きく違います。使えるようになるには、「知っていることを意識的に、繰り返し使う」ことが大切です。一度使えば自信を持ってますし、数度使えば会話の中で楽に出てくるようになります。

未来への一歩を応援します

就職サポート最前線

目まぐるしく変わる社会情勢により、大学生の就職戦線も大きな転換期を迎えています。学生はもとより保護者の皆さんにとっても、その動向は大きな関心事ではないでしょうか。今回は、昨年11月に開催し

た「保護者のための就職支援セミナー」とともに、学生一人ひとりの夢や希望の実現に向けた本学の多彩な就職支援プログラムをご紹介します。



就職活動の「今」を知る 保護者向けセミナーを開催

昨年11月24日、2014年春の採用に向けた就職活動解禁日(12月1日)を直前に控え、本学では初となる「保護者のための就職支援セミナー」を開催しました。



多くの保護者の方が足を運んでくださり、熱心に耳を傾けてくださいました。

今回は「全体セミナー」と「学科別説明会」の本立てで構成し、就職担当スタッフが最新の情報をお届けするとともに、本学の就職支援体制について理解を深めていただく内容となりました。

全体セミナーでは、まず、近年の就職状況(就職率や内定率の推移)を報告。次に1年以上にわたる就職活動全体のスケジュールと合わせ、就職ガイダンスや企業研究会、OGとの集いカフェなどのほか、マンツーマンで指導する個別相談まで、学内外からサポートする本学独自の就職支援プログラムを紹介しました。

続いて採用企業が新卒者に求める「コミュニケーション能力」についての考え方、さらに近年の就職活動のキーワードともいえる「ES(エントリーシート)」や「GD(グループディスカッション)」の内容と企業側の狙いを説明。従来の履歴書や面接の練習だけでは内定獲得が厳しい環境の中で、就職



全体セミナーで講師を務めた
菊田・学生支援グループ就職担当

活動と学業を両立しなければならぬ学生の現状を知っていただきました。最後は保護者の支援につい



学科別説明会では職種・業種ごとの就職実績も紹介。

て、無意識に口にしてしまう「NGワード」やフォロワーの仕方のほか、家庭でできる就職対策に触れました。就職活動に頑張るお子様を信じ、時には励まし、温かな心でサポートしていただきたい……そんな願いを込めてセミナーは終了しました。

学科別説明会では各学科の特色を生かした就職状況や支援体制を説明し、活発な質疑応答が行われました。また、当日は学生への就職情報発信拠点である「学生サポートセンター」も開放。参加された保護者の方から、「今後の子どもとの向き合い方が分かった」「どのような進路があるかが分かり、家庭で話しやすくなった」といった感想をいただき、大変意義のある一日となりました。

長年に渡る就職実績と充実したサポートプログラムで時代のニーズに合った就職支援を展開しています！

予約制による丁寧な就職相談をはじめ、予約外やメールでの相談にも柔軟に対応し、学生の皆さんが自信を持って就職活動に臨めるよう、きめ細やかにサポート。企業で人事を経験したり、キャリアカウンセラーの専門資格を持ったスタッフや内定を獲得した先輩、社会で活躍するOGまで、本学ならではの“つながり”を生かして全面的にバックアップしていきます。



企業を知る。採用担当者に会える！
約70社が参加する本学限定イベント

本学主催 合同企業研究会

「宮学の学生に直接PRしたい」という企業が集まる合同企業説明会。毎年多彩な業種から約70社が参加しています。企業の担当者から直接話を聞くことで具体的な仕事内容が分かり、「業種や職種の選択肢が広がった」という学生が多く、より積極的に就職活動に取り組むきっかけになります。



先輩からの心強いサポート！
内定を獲得した4年生が応援してくれる

ジュニア・アドバイザー 制度

企業から内定を獲得した4年生が、就職活動中の後輩をサポートする制度です。リクルートファッション講座や就職体験報告会など、経験に基づいたノウハウを伝えるイベントを開催。アットホームな雰囲気の中で、きっと新しい発見に出会えます。



OGから激励&アドバイス！
社会へ羽ばたいた先輩に会える

OGとの集いカフェ

多彩な業種・職種で活躍する本学卒業生を招き、働く上での苦労や喜び、やりがいについて話を伺います。学生からの質問・疑問には、自身の経験を踏まえ適切にアドバイスしてくれます。就職活動で悩む人も勇気づけられるはずです。



その道のプロがコツを伝授！
年間25回にわたる実践講座

就職ガイダンス

学内外の専門家による履歴書・面接の実践練習やマナー講座を開催したり、公務員を目指す学生を対象としたガイダンスや受験対策講座、公立保育士志望者に向けた模擬試験など、幅広いジャンル・内容で就活生活をサポートしています。



街に元気な想いを届けたい。

Action

大手食品会社とのコラボレーション。
地域の音楽ホールとの連携…。
地域とつながっていくことで、
学生の元気な想いと笑顔が広がっています。

食品栄養学科 平本ゼミ

おいしい！の笑顔を広げて

東北の人々に元気と勇気を与えたいという想いから、山崎製パンさんと食品栄養学科 平本ゼミとのコラボレーションが実現しました。

まずは、6月に山崎製パン仙台工場の見学からスタート。製造の各セクション担当者からの説明を受け、工場での製造が家庭でのパン作りとまったく違うことが分かりました。その後、「地元らしさをアピールできる「こんなパンがあったらいいな！」というア



アイデアをもとに試作を重ね、同時にパンのネーミング、パッケージ作りをプロデュース。テレビCM制作は広報室インターンが担当し、CM企画から絵コンテ制作、出演まで行いました。こうして、ようやく出来た女性向け「いちごのデニッシュサンド」と子供たちに喜んでもらえるパン「ころもっちドーナツ(3)」の2種類を村井嘉浩宮城県知事にもお届けしました。11月からは宮城県、岩手県、山形県、福島県のスーパー、コンビニエンスストアで販売されました。



暖かな拍手に、
演奏者と聴衆の想いがあふれ

11月23日、石巻市遊学館かなんホールに、約1年8ヶ月という空白の時間を経て、美しい音楽が響きました。



この日、本学音楽科が遊学館との共催で復興祈念コンサートを催し、フルートアンサンブル（ラウト作曲「三重奏曲」ト長調 作品119より）、ソプラノ独唱（ブッチー作曲歌劇《ラ・ボエーム》より「私が街を歩くと

き」ほか）、そして、グリーグ作曲「ピアノ協奏曲」を披露しました。

記念すべき日の大役を担ってひたむきに演奏する学生と、万感の想いでそれ受け止める聴衆。音楽だからこそ可能な暖かく深い交流が、ホールを満たしました。

また一つ、復興に向けた「音色」が響く

石巻市遊学館かなんホールは、震災後市内にただひとつ残った本格的音楽ホールです。本学音楽科とのつながりは6年ほど前から。新設されたホールに本物の芸術音楽を——という同館の希望と、東北唯一の高等音楽教育機関として地域へ貢献したい——という双方の強い願いが上手にかみ合ったことで、「これもれびの降る丘音楽会—宮城学院女子大学音楽科によるコンサート」が始まり、年2回の定期公演と、音楽

科教員による地域の子どもたちへの演奏指導を続けていました。しかし

2011年の東日本大震災でホールも天井が崩れるなど被災。その後長い復旧作業を経て、この日を迎えたのです。

コンサートは、『記念』ではなく『祈念』と銘打たれました。舞台と観客席という隔てなく、会場に祈りはつ。地域に豊かな音楽が溢れる環境を取り戻し、さらに大きく育んで未来につなげる。その想いを新たにしたコンサートでした。



被災地と全国のママをつなぐ
園児エプロンプロジェクト
宮城の女性を元気に

[取材]

広報室インターンスタッフ

青田 千里 (日本文学科3年)

伊藤 空美 (日本文学科3年)

及川 杏奈 (日本文学科3年)

星 枝里 (英文学科3年)

——こちらの「なごみサロン」を運営されるきっかけは

卒業から現在まで、MCやナレーション、司会など『声』の仕事が続いています。聴く人にきちんとメッセージを届ける『声』のために健康管理に気をつけていましたが、5、6年前から小さな不調を繰り返し、自分でコンディショニングを整えられるマッサージュやアロマの勉強を始めました。その後、子供を授かり、この技術とママの目線を活かして、ベビーマッサージュ講座を開きたいと準備をしていました。

実は、震災翌日の3月12日にサロンのホームページを作ろうと打ち合わせを予定していましたが、すべてが白紙になりました。その直後、石巻の実家から震災の津波で姪が行方不明という知らせが…。言葉では言い尽くせない悲しみの中で、追い打ちをかけるように声の仕事が3ヶ月間止まった状態になりました。私を支えてきてくれた大事なものが、震災によって次々奪われる不安感、悲嘆と虚



実際に手にしてみても細やかな配慮に感動。



手作りの園児エプロンを使う子どもたち優しい肌ざわりが快適そうです。



誰かの役に立つ。仮設住宅に住むお母さんたちの元気になっています。

無感に思い悩みましたが『少しでも前に進まなければ』と決心し、2011年6月にオープンしました。

——サロンではどのような活動をされているのですか

ここは、すべての女性を応援するシアサロんです。足つぽ、ベビーマッサージュ、本の読み聞かせ、マタニティ・産後ヨガ、ベビー英語、リトミックなどの講座を専門の先生が曜日ごとに担当しています。

私自身ママでもあるので、子育て中の仲間が多く集います。彼女達のストレスや不安を和らげ、大切な子供たちの成長を応援できればと思っています。

——その思いが園児エプロンプロジェクトに繋がったのですか

何もできない自分に歯痒さを感じ、自分も含めママができる支援は何かと考えていました。そんな折、娘が保育園で使うたくさんのタオルエプロンを、石巻の

姉がすごく喜んで手縫いしてくれたことを思い出したんです。『忙しい園児ママは助かるし、仮設住宅に住むお母さんたちの収入源になるのでは…』と思い当たりました。

南三陸歌津の女性たちを紹介してもらい、愛媛の今治から支援を受けたタオルでのエプロンづくりを依頼。「縫っている心が落ち着く」「誰かの役に立っていると思うと嬉しい」と言ってくれます。中には「親に負担はかけられない」「でもバイトの場がない」という仮設住宅に住む女子高生も一緒に作ってくれています。

また娘の保育園では趣旨に賛同し、見本を作り交流のある他の保育園に紹介してくれています。双方が幸せになれて、かつ継続的な新しい支援のカタチとして、全国にその輪が広がっています。

私の悲しみはまだ癒えませんが、誰かの役に立っていると思うと私自身救われる思いです。歌津の皆さんにも助けられる仲間にも感謝しています。

なごみサロン☆TRICKandTREAT

宮城県仙台市青葉区春日町4-28 SUUT401号
TEL 090-8615-8971
<http://trick-and-treat.com/>

Profile 大坂 裕子さん (旧姓 平塚)

1994年3月宮城学院女子短期大学教養科文学コース卒。在学中の1993年よりフリーアナウンサー、ナレーション、MCとして活躍。2011年、インド式ヘッドマッサージュ、足つぽなどを行行「なごみサロン☆TRICK and TREAT」をオープン。「園児エプロンプロジェクト」も立ち上げた。

サークル紹介 01

チャレンジスポーツ ボランティア

- 部員数：20名
- 活動日：不定期
- 活動場所：大学体育館、各小学校校体育館

アスリートの自立と社会参加を応援。

私たちは、スポーツを通して知的発達障害のある人たち“アスリート”の社会的自立を支援する国際組織、「スペシャルオリンピックス日本・宮城」のコーチとして活動しています。

コーチと言ってもスポーツに関する特別な技術はならず、アスリート一人ひとりに寄り添い、トレーニングや競技会などのさまざまな場面でお手伝いをするボランティアです。

喜びを共有する瞬間が、一番嬉しい。

障害者についての知識がない、という人も心配はありません。ハンディキャップに負けない強い精神力や心の純粹さなど、アスリートの皆さんから学ぶことも多く、一緒に目標をクリアできた時の達成感・充実感は格別ですよ。

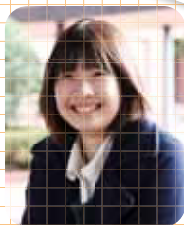
クリスマスパーティやチャリティコンサートなどのイベントにも、スタッフとして楽しみながら参加しています。ボランティアだからといって身構えず、まずは自分の出来ることから始めてみませんか。



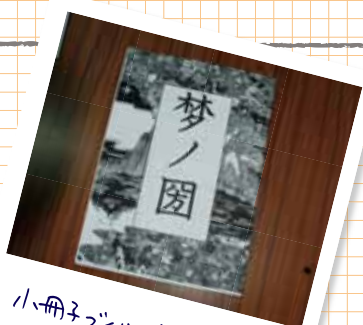
いっしょに学ぶ充実感



指導にも熱が入ります!



部長
安保麻衣さん
(発達臨床学科3年)



小冊子づくりも表現のひとつ



自分を表現する、楽しい!



部長
加藤綾香さん
(日本文学科3年)

サークル紹介 02

喜劇同好会 Pulcinella

- 部員数：15名
- 活動日：月・木
- 活動場所：教室

“表現”にこだわり、個性と創造力を磨く。

私たちは、結成して1年半ほどのフレッシュな同好会です。喜劇のあり方を追求しながら映画・演劇などを観て意見交換をしたり、台本を書くなど“表現”に関わる多彩な活動を行なっています。

また、学祭ではメンバーが思い思いのスタイルでお客様をもてなし、自分たちで編集・作成した小冊子はとても好評をいただきました。

仲間とともに、次のステップを目指して。

現在のメンバーは3年生が中心。他の文化系サークルと掛け持ちしながら、この同好会で自分らしい表現を追求したいという人が殆どです。今後は実際に喜劇を演じることや、異なるジャンルとのコラボレーションなど、活動領域を広げていきたいと考えています。

喜劇が好きの人、何かにチャレンジしたい人、自分を豊かにしたい人は、ぜひ気軽に参加してみませんか。あなたの新しい視点や価値観で、これからの喜劇同好会を一緒に作り上げましょう。

MG・LAC ボランティア活動を報告

12月14日(金)・15日(土)、東北学院大学で「復興大学災害ボランティアアステーション」主催

らが、日頃の活動と自分たちの考えや思いについて発表しました。

のシンポジウム「人と社会の脆さと大学生ボランティアの意義」が開催されました。2日目のセッション「大学生にとつてのボランティアの意義・課題・可能性」では、「宮城学院女子大学による子ども「日常」再生ネットワーク」の代表者



東北圏のみならず、東京、関西、九州の大学生も参加し、ボランティア活動から学んだことや課題などについて、広く意見を交わしました。大変貴重なコメントや質問、たくさんの方から気付きや刺激を得て、継続して取り組んでいく意思を新たにしました。

新大学寮「さくら寮」 いよいよ完成!

桜ヶ丘団地内の小高い丘の上に少しずつ全景が見えてきた新大学寮。その様子を、通学時に目している人も多いかも。オープンキャンパスでは実

際に現地に作られたモデルルームが公開され、たくさんの方が訪れました。設備の充実した個室の様子に、新生活への希望が膨らみます。新しい寮、新しい出会い、宮城学院の新しいシーンが、この春お目見えです。

池上冬樹氏現代文学の 『いま』を、読み解く

日本文学科と日本文学会は、11月1日に「文学のいま―新人賞選考・文学の潮流・作家たちの苦悩」と題し、池上冬樹氏の講演会を実施しました。池上氏は山形市在住の文芸評論家で週刊文春、小説すばる等で活躍。日経小説大賞をはじめ多くの新人賞の予選委員・せんだい文学塾の講師を務め現代文学の流れをよく知るお一人です。具体的な受賞エピソード、作家の逸話を例に出版業界の厳しい現状も伝えながら「土壌に太い根を張り、何度も花(作品)を咲か



すことが大切」と集まった学生たちには熱いエールを送っていました。



f 公式 facebook ページ誕生! <http://www.facebook.com/mgu.ac.jp>

タイムリーな情報発信とグローバルな交流の場を目指し、宮城学院女子大学公式 facebook ページが誕生致しました。ぜひ「いいね!」をクリックしていただき、国内外を問わず交流の場としてご活用下さい。また、災害時には緊急連絡ページとして大学から情報を発信致します。

編集後記

震災から3年目の春がやってきました。パルティール15号をお届けします。本誌でもたびたびお伝えしてきた通り、このところ宮城学院の学生たちはかつてないほどアクティブです。自ら問題意識をもって外に飛び出し、地域や企業の人たちと交わり、自分たちにできることをする。できる、できない、ではなくて、できることをする。まずやってみる。そしてできることを増やしていく。先生方の強力かつ愛情に満ちたサポートはもちろんですが、実現するのは学生たちです。震災からの復興にはまだまだ時間がかかると思いますが、東北の未来を築いていくのはきっと彼女たちだと思います。

(M・F)



Letter Essay

みなと横浜から仙台へ ―宮城学院の精神を訪ねて(4)―

江戸時代末期から明治初期にかけて、多くの宣教師が来日した。1858年10月にはヘボン夫妻が来日し、横浜に居を定めた。その後を追うように、ブラウンが、そしてバラが、横浜の住民となった。当時の日本ではキリスト教が禁止されていたため、彼らは日本語を習得して塾を開き、日本人青年に英学教育を行った。横浜に住む彼らは、日本に派遣した団体こそ異なっていたが、いずれも宗教改革者カルヴァンの流れを汲む改革・長老派のアメリカ人宣教師であったためか、同じ寺に住み連携して教育活動を展開した。ここに集った青年の多くは、明治維新で没落した佐幕派の子弟であった。

この中からバラを仮教師として1872年に生まれたのが、日本人による最初のプロテスタント教会といわれる日本基督公会であり、日本人青年たちによるこの運動を「横浜バンド」と呼んだ。横浜バンドからは、植村正久を初めとする多くの人材が輩出し、彼らは日本におけるプロテスタント教会の発展およびキリスト教主義学校の設立と運営に主導的役割を担った。

会津藩士の長男・井深 梶之助は、ヘボン塾やブラウン塾で学び、日本基督公会の流れを汲む日本キリスト教会の牧師として働くとともに、明治学院の設立に貢献し、第2代総理として、現在に至る明治学院の基礎を築いた。

弘前藩から派遣された本多庸一は、ブラウン塾やバラ塾で学んだ後、弘前に戻って東奥義塾を再興し、併せて来徳女学校(現弘前学院)を設立した。さらに東京に出て青山学院の設立に尽力し、第2代総長となった。

松山藩出身の押川方義は、横浜で学んだ後、新潟での伝道を経て仙台に至り、東北学院と宮城学院の開学に大きな貢献をした。宮城学院の精神は、押川を経て横浜バンドに遡り、ついにはカルヴァンに至るのである。

宮城学院女子大学 学長 海野 道郎

MG archives



前列左から、ホーイ(合衆国改革派教会)、ノックス(米国長老教会)、押川(仙台教会)、後列左から2人目、吉田(仙台教会)、マコーレー(米国長老教会)、バラ(米国改革派教会)。改革・長老派系協力ミッションの宣教師と各教会を代表する教師・長老たち。

最初の宮城中会

「明治19年の春初めて宮城中会を開き東京及び横浜よりノックス、バラ、マコーレーの三氏来仙し仙台より押川方義…」(『仙台日本基督教会歴史』1907)。この前年1885(明治18)年、仙台教会の押川は、自ら開拓した古川、岩沼、石巻の教会を組織して日本基督一致教会と連合している。

(写真・文・宮城学院資料室)